

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 22 日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02255

研究課題名(和文)近世古今集注釈史の研究

研究課題名(英文)A Study of the History of Kokinwakashu Learning

研究代表者

西田 正宏(NISHIDA, MASAHIRO)

大阪府立大学・人間社会システム科学研究科・教授

研究者番号：00305608

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：近世における『古今和歌集』の注釈を、学芸(古典学)史に定位するために、個別の注釈について検討、考察を行った。具体の成果は次のとおり。

契沖の『古今余材抄』を取り上げ、その解釈が歌を詠む実作者の視点から離れ、純粹に学問的であることとこの注釈の意義があることを述べた。また宗祇門流の注釈書と考えられてきた『古今連著抄』を、宗祇門流のものではなく、地下歌人の学びの成果であると捉えなおした。このことは他の宗祇系の注釈書についても再検討を促すことになる。最後に、古今伝受について、享受史という観点から再検討し、近世における「古今伝受」の具体を浮かび上がらせるとともに、本居宣長による批判の背景を考察した。

研究成果の概要(英文)：The goal of this project is to make "History of Commentaries" by thorough investigation of the following commentaries.

"Kokinyozaishou" written by Keichu, the great achievement is commenting on "Kokin Wakashu" which just a collection of Japanese poems. It means Keichu separated and became independent academic view from the learning by poets who make Waka. "Kokinrenchoshou", it had been considered as the comment by Sougimonryu, but the study reveal it should be the work by Jige poets. The renewed view will suggest reinvestigating other commentaries of Sogi-lineage.

"Kokindenju", by reinvesting it from the historical view, the study proved the background of the criticism by Norinaga Motoori.

研究分野：日本文学

キーワード：日本文学 古今和歌集 古典学史

1. 研究開始当初の背景

申請者は、地下歌人の学芸(学問と文芸)について、個別、具体的に検討を加え、研究史上、等閑にされてきた彼らの学芸史上における意義について考察を進めてきた。その成果の一部は、『松永貞徳と門流の学芸の研究』(2006年2月、汲古書院)として刊行した(2005年度科学研究費補助金<研究成果公開促進費>・課題番号175116の交付を受けた)。

近年は、契沖の注釈の享受(評価)を軸に、上方学芸史を構想するために、契沖の学芸や懐徳堂の和学について、特に『古今和歌集』や『伊勢物語』の注釈を中心に考察を深めてきた。2007年には、科学研究費(基盤研究C「上方学芸史の研究」【課題番号19520161】)を得て、研究の十分でない懐徳堂教授・五井蘭洲の『古今通』の伝本の調査、注釈内容の検討、さらに翻刻を行った。その成果の一部は、『上方文化研究センター研究年報』第10号、第11号および第14号に『古今通』夏部四本対照翻刻』『古今通』恋一部四本対照翻刻』『古今通』仮名序四本対照翻刻』として公刊した(2009年・2010年・2013年3月)。

さらに2009年度からは、懐徳堂の和学に絞り、科学研究費(基盤研究C「懐徳堂の和学の研究」【課題番号22520186】)を得て研究を進めた。特に五井蘭洲の和学について、懐徳堂記念会主催の懐徳忌で講演し、それを『懐徳』81号に掲載した(2013年2月)。また、契沖の影響について、特に契沖の『古今余材抄』を取り上げ、本居宣長の『古今集遠鏡』との関係を論じるなかで、『古今通』(蘭洲本)についても言及した(『古今集遠鏡』と『古今余材抄』、『文学史研究』第48号、2008年3月、大阪市立大学国語国文学研究室文学史研究会)。

如上の研究は、必ずしも『古今和歌集』の注釈書に絞って、検討を加えてきたわけではないが、結果的に彼らの学芸の様相を具体的に窺うためには、『古今和歌集』の注釈書を検討することがすこぶる有効であるという思いに至ったのである。

冒頭に記した著書においても望月長孝の古今和歌集注釈書である『古今仰恋』を取り上げている。また『伊勢物語』の注釈書を取り上げること、『古今和歌集』の注釈書との関係を考えざるを得ず、間接的ではあるが『古今和歌集』の注釈書の研究にもつながっている。

申請者は、ここ10年は主として近世の注釈書を中心に考察を重ねてきたが、「切紙とは何か 古今伝授「三鳥」をめぐる」(前田雅之編『中世の学芸と注釈』、竹林舎、2011年10月)でも扱ったように、そもそもの研究の出発は、中世の『古今和歌集』の注釈書であり、中世以来の注釈書全体を見わたすことができるという強みがあると自負してい

る。

またさいわい申請者の所属する大阪府立大学では、5年前にまとめた古今伝授関係の資料を購入した。一部紹介され、解題が具わるものもあるけれども、決して十分とはいえず、今回の研究では、これらの資料の活用も視野に入れている。

2. 研究の目的

中世の『古今集』の注釈書については、片桐洋一氏の『中世古今集注釈書解題』(1971年~1987年、赤尾照文堂)に重要なものが翻刻され、その後も、資料の紹介、翻刻、影印での出版が続いたが、近世のものについては、そもそも大部であるため、紹介すらされてこなかったというのが現状である。

もはや公開については、WEB上でそれほど問題なくおこなわれるようになり、国文学研究資料館による事業の展開から鑑みても、個人が企画するのは、むしろ適切ではないだろう。となれば、個人が研究としてなするのは、それらの注釈書の性格を見究め、それが、いったい、どのようなものであるのか、どのような系譜にあり、どういった注釈書が、どのように利用されているのかという詳細な解題を作成することであろう。正確な解題が具わっておれば、安心して資料を扱うことができると思われる。

当面の見通しをつけるために、今回の科学研究費の申請を3年とし、一年におおよそひとつの注釈書の性格を明らかにすることを目標とする。それらがおのずと、他の注釈書や出版された注釈書と関係し、結果的に、近世古今集注釈史を素描することになるように考えたい。その点を考慮して、次の注釈を取り上げる。

契沖『古今余材抄』

大阪府立中之島図書館蔵「古今集諸抄」

所収注釈書群

望月長孝『古今仰恋』

北村季吟『古今教端抄』(『古今拾穂抄』)

河瀬菅雄『古今見聞抄』

小澤蘆庵『古今注解』(大阪府立大学附属図書館蔵)

まず契沖の『古今余材抄』について取り上げる。この注釈書については、すでに申請者もいくつか論文を執筆し、また直接ではなくても言及してきたところであるが、近世あるいは現代まで視野を広げてもすこぶる高い達成を示しており、近世古今集注釈史を素描するうえで、一つの指標として捉えることができる。この『余材抄』を軸に、例えば、ほぼ同時代に成立した望月長孝『古今仰恋』、北村季吟『古今教端抄』(『古今拾穂抄』)、河瀬菅雄『古今見聞抄』と比較検討することで、それぞれの注釈の達成が確認されるとともに、欠点も見えてくると期待される。

また大阪府立中之島図書館に収められた

「古今集諸抄」と一括される注釈書群は、中世に成立したものがほとんどであるが、望月長孝の直接の門流にあたる平間長雅や有賀長伯がその書写や享受に関わったと推量され、この注釈書群の研究は中世の注釈書の享受を考える上でも極めて有意義である。従来は、成立にばかり研究者の眼が注がれてきたが、書写の問題についても検討を加えなければならない。近世の学芸の問題としても、考察する必要があるのである。

以上のことを踏まえ、近世における『古今和歌集』の注釈を近世文学史、学芸(古典学)史に定位することを目的とする。従来『古今集』の注釈史については、先述したように片桐洋一氏の『中世古今集注釈書解題』が基本文献として利用されてきた。この書によって、中世については、一定の見通しがつけられたが、近世については、流派という考え方は違う観点からの再検討が必要である。

また地下歌人の古今伝受については、日下幸男氏の『近世古今伝授史の研究 地下篇』(1998年、新典社)が全体を見渡しており、すこぶる有効であるが、個別具体の注釈書の研究には及んでおらず、古典学史を構築するには不十分である。本研究では、これら二著を参考にしつつ、なお近世独自の出版という視点も加味しながら、近世古今和歌集注釈史の構築をめざす。

3. 研究の方法

未刊行、未翻刻の資料をあつかうので、まずテキストの翻刻からはじめる。次に読解を進めつつ、さまざまな注釈どうしをつき合わせることで、その影響関係を明らかにする。さらに影響を受けているところ以外の注釈こそ、その注釈独自の説を展開しているところであると考えられ、その注釈の拠ってくるところと方法を検討し、その注釈の特徴を導き出すことにしたい。

その上で、改めて、古今和歌集注釈史、ひいては古典学史の中にその注釈がどのように位置づけられるのかを考察する。

4. 研究成果

初年度は主として大阪府立中之島図書館蔵の古今集注釈群(「古今集諸抄」)を扱う予定であったが、中之島図書館の改築に伴う閉館ため、急遽予定を変更し、小澤蘆庵の『古今集注解』の検討を行った。まずすべてを翻刻した。古今集顕昭注や、宗祇の『両度聞書』など、版本として刊行されている注釈書を利用しつつも、望月長孝の『古今仰恋』と関連するところも見いだされ、性格を見究めるまでには至らなかった。またそもそも小澤蘆庵のものであるという証左は、題箋のみであった、その点の考証も課題として残った。翻刻

し、一定の検討は終えているが、今のところ、孤本でもあり、紹介も控えている状況である。なお初年度はそれと並行して、以前から課題として取り組んできた契沖の注釈について再検討した。結果として、契沖の注釈の特徴がその実証性だけにあるのではなく、歌を詠むための歌学から注釈行為を独立させたことにあることを考察した「添削の批語と注釈のことは 契沖の注釈の学芸史的意義」という論文を公刊した。

次年度は、初年度に取り組みなかった大阪府立中之島図書館蔵の古今集注釈群(「古今集諸抄」)を検討した。なかでも宗祇が関わったとされる注釈書を検討することにした。具体には、『古今連著抄』を検討した。伝本の整理からはじめると、この注釈には、伝本によっては、地下歌人・望月長孝らによる書き込みが見受けられることや、宗祇の『両度聞書』の説とは必ずしも一致しないところが見受けられることなどから、『古今連著抄』を宗祇系の注釈書ではなく、『古聞』や『両度聞書』などを勉強した地下歌人たち手になる注釈書ではないかと考え、「地下歌人の古今集研究 『古今連著抄』をめぐって」という論文にまとめた。また同年の年末に古今伝受のシンポジウムで発表する機会に恵まれた。そこでは「古今伝受」という営みの持つ意味やそもそも「営み」としてとらえられてきたのはなぜかというようなことを問題提起として発表した。

最終年度は、その古今伝受の発表を契機として、主として古今伝受にかかわる研究を推し進めた。特に中世という時代から研究を始めた申請者にとっては、近世における古今伝受の展開はもっとも関心のあるところであり、古今伝受、それ自体の研究史や享受史をふくめ、実作とのかかわりなど、従来見過ごされてきた視角から検討を重ねた。従来、形式面・儀礼的な側面ばかりが重視されてきた古今伝受が実作には影響を及ぼさなかったのかという視点から考察した「古今伝受と実作と 『両度聞書』『古今仰恋』を中心に」を発表した。

また昨年度シンポジウムで発表した「古今伝受」の享受史について、特に近世の歌学書や随筆類に現れた「古今伝受」を取り上げ、それらが具体的にどのような「古今伝受」を対象と考えていたのかを考察し、「古今伝受」そのものが学芸史のなかでどのように扱われてきたのかを検討を加えた。さらにそれが本居宣長の古今伝受批判にどのようにつながってゆくのかを検討し、「古今伝受」の享受史 近世の歌学書・随筆類をめぐって」という論文にまとめた。この論文は、現在入校中であり、2018年7月に刊行の予定である。

加えて、本年度は、昨年度からの継続で大阪府立中之島図書館蔵「古今集諸抄」の調査、検討を中心に行った。特に昨年度『古今連著抄』を取り上げた折に、宗祇流注釈書の再検

討を行う必要性を感じていたので、同じ宗祇系の注釈と目される『宗祇略抄』を取り上げることにした。

宗祇の古今集注釈の基準とすべき『両度聞書』と比較しつつ、他の注釈書（『古今栄雅抄』など）も見合わせながら、『宗祇略抄』注釈の性格を見究めるべく努めた。が、さまざまな注釈書と同様の説が展開されている一方で、まったく独自の見解も見いだされ、残念ながら、本年度中に論文化するには至らなかった。しかし、従来『宗祇略抄』という書名から漠然と『両度聞書』を簡略にしたものと認識されてきたが、その点は否定されよう。他の注釈とも見合わせる必要が出てきたのは、『両度聞書』には関わらない部分が多く存在するからである。いま少し調査、検討の必要があるが、見通しを述べておけば、この注釈書は『両度聞書』を理解するための注釈で、地下歌人による学習の成果とみておくのがよいと思われるのである。

以上、当初の予定通り、主としてあまり検討されてこなかった近世の古今集注釈書を取り上げ、それらを注釈史上に定位するべく努めてきた。契沖の『古今余材抄』の学芸史上における意義の再検討や、宗祇系の注釈書の見直し、また近世における古今伝受の享受についてなどについて、一定の成果を上げることができたと思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(3件)

西田正宏、近世前期の万葉学 研究と実作と (『日本文学研究ジャーナル』第5号 特集「万葉集はどう読まれてきたか」古典ライブラリー刊) 2018年3月、pp,75~85、査読有

西田正宏、地下歌人の古今集研究 『古今連著抄』をめぐって (『国文学論叢』第六十二輯(日下幸男教授退職記念号) 2017年2月、pp,129~142、査読有

西田正宏、添削の批語と注釈のことは 契沖の注釈の学芸史的意義 (隔月刊『文学』2016、1・2月号、岩波書店) pp,214~231、査読有

〔学会発表〕(計2件)

シンポジウム「歌神と古今伝受」(2016年12月10日、住吉大社) 西田正宏、「古今伝受」とは何か?

江戸古典学研究会 「戸田茂睡の古典学」
西田正宏 (2015年8月29日)

〔図書〕(計2件)

西田正宏、古今伝受と実作と 『両度聞書』 『古今仰恋』を中心に (『江戸の学問と文藝世界』 pp,51~69、2018年2月、森話社、総頁数321頁)

西田正宏、伝授と啓蒙と 松永貞徳『なくさみ草』をめぐって (鈴木健一編『形成される教養 十七世紀の日本の知』 pp,174~194、2015年11月、勉誠出版、総頁数453頁)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西田 正宏 (NISHIDA MASAHIRO)
大阪府立大学・人間社会システム科学研究科・教授
研究者番号：00305608

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者 なし